若草山三千桜

義雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
若草山三千桜

【Ｎコード】
Ｎ３１８７Ｚ

【作者名】
義雄

【あらすじ】
明日は全国的に晴天となるでしょう。ですが、奈良県では夕方から天気が崩れ、ところによりにわか鬼火です。また、奈良県全域に餓鬼注意報も出ていますので、お出かけの際はお地蔵様を忘れないよう気を付けてください。
鹿が空を舞い、仏像型ロボットが地を走る。神も悪魔も仏も鬼も、幽霊妖怪なんでもござれ。そんな、少しずれた日本の奈良県で暮らす主人公（ヒロイン系）のお話。

奈良と地蔵バッグと僕（前書き）

※この物語はフィクションかつカオスで罰当たりです。神も悪魔も仏も鬼も、幽霊妖怪なんでもござれ。

奈良と地蔵バッグと僕

『続いては地域のニュースです。本日は明日香村で埴輪祭が行われました。千体もの埴輪が道いっぱいに行進する様を、地域の人たちや観光に訪れた方々が楽しそうに見られていました』

『いや、これは毎年のことながらすごいですね』

『ぴょこぴょこと跳ねて動く埴輪が可愛らしくて、お子さんたちも顔をほころばせていますよ』

テレビの中ではニュースキャスターがうっすら微笑みながら今日の出来事を読み上げている。

この時間帯はチャンネルを回しても見るものがない。

ぼんやりと画面を眺めていると、確かに埴輪のコミカルな動きは少し笑えてくる。

『午後からは奈良市内で新人警官による騎鹿(きかたい)隊行進があります。普段は見せない鹿たちの雄々しい姿が見られるこれ以上ない機会なので、是非見に行かれることをおすすめします』

『鹿せんべいをねだる様子からは想像もできないほど素晴らしい動きを毎年披露してくれますけれど、今年はどんなイベントになるでしょうか』

『明日が楽しみですね。この後のお天気情報でもお知らせしますが、明日の奈良県は夕方から天気が崩れ、ところによりにわか鬼火です。奈良県全域に餓鬼注意報も出ていますので、お出かけの際はお地蔵様を忘れないよう気を付けてください』

「うわ、餓鬼注意報か。地蔵バッグはっと」

クローゼットの中をかきわけ、一番奥から石っぽい質感が頼もしい地蔵バッグが出てきた。

誕生日プレゼントとしてもらった宝印ブランドものなのに、と我ながらぞんざいな扱いに苦笑する。
頭の部分にあるファスナーを開けてひっくり返すと、仏様と鹿が合体したようなマスコットキャラのキーホルダーがころりと落ちた。
かわりにレトルトのお粥と筆記用具、大峰山の美味しい水、清め塩を放り込んで明日の準備は万端。
小物入れの塩のストックも最後だった。

「明日購買行かなきゃ」

そこそこの時間になっていたのでベッドに転がり読書にいそしむことにした。

――『これなら納得！　般若心経』はもう読み終えた。『鑑真とガンジー、その共通点』もそんな気分じゃないしなぁ。

漫画スペースに目を移す。
最近新装版の出た『オートマタ雑技団』は泣きまくっちゃうからダメだし『九頭龍高校ホステス部』、『釈迦に届け』も違う。『教皇聖下の料理人』でもない。
思い悩んだ末にゲームの攻略本を手に取った。
明日は『ＡＲＭＯＲＥＤ　ＢＵＤＤＨＡＲＵＰＡ　３　ＳＩＬＥＮＴ　ＧＡＮＤＨＡＲＡ』をやろう。
『クシャーナ磨崖仏開発工場救援』というミッションでどうしても天道ランクがとれない、せいぜいが人間道までだ。
どうにも攻撃に専念しすぎて上から降ってくる衛星バジュラ砲に対応できない。
回避重視の軽量で行くか、重量系高火力で攻めるか、きっちり仏像構成も考えておかないと。

「スパディア（スーパーディアティー大戦）とミックスしてくれないかなぁ」

百を超える色んな仏具を組み合わせて機体を造れる仏像アクションゲームと、世界各地の神様を雑多に混ぜ込んだ戦略ゲーム。
二つが合体すると、もう収集がつかないくらい楽しそうなのに。

ほどなく眠気がやってくる。
電気を落として僕は夢の世界に旅立った。

――――若草山三千桜――――

春眠暁を覚えず、とは誰の言葉だったか。
ずいぶん前に習った漢詩だったと思うけれど忘れてしまった。
まぁ、何が言いたいかと言うと。

「眠い……」

風もない穏やかな日だ。
夕方から怪しくなると聞いていた空を見上げても雲一つなくて、
柔らかい日差しがこれまた気持ちいい。
ブロック塀沿いに時折目にかかる餓鬼さえいなければとてもいい

日だったに違いない。
見かけるたび般若心経を唱えてやるのだけれど、いい加減バッグの中身も軽くなってきた。
――学校に着くまでお粥と水が持つかな。

とは言えお経を唱えて地蔵バッグの中にある飲食物をお供えしないと今度は僕が取り憑かれる。
朝っぱらからハラペコになるのはゴメンだし、脂肪吸引されるのもイヤだ。
池のほとり、いつもの待ち合わせ場所についてベンチに腰掛ける。
満開の桜が綺麗だった。

「おはよー」
「おはよ」

日向ぼっこをしているカメになんとなく目をやっていると、同級生が近づいてきた。

「いい天気やねー、まさに行進日和って感じ」
「おじさん今年も？」
「うん、鹿せんべいを忘れるアホが毎年おるって朝からぼやいとったわ」

彼女は若草かの子。胸元に金糸で校章を繕った紺のブレザーに身を包み、学生帽をかぶり、背中に赤い牛皮製ランドセルを背負った鹿だ。
つぶらな瞳と艶やかな毛並み、ところどころにある白い斑点がチャームポイントだとか。
いわゆる僕の幼馴染というヤツでなおかつ腐れ縁。幼稚園からの

知り合いだけど十七になっても同じ学校に通っているだなんて、想像もしていなかった。

「あれ、手袋とブーツ新調した？」

「お、よー気づいたやん。始業式やから気分一新、今日からアグレッシブに生きるで！」

前足には明るいチェック柄のミトン、後ろ足には黒いブーツを履いていた。

おしゃれさんな彼女らしくセンスがいい。

「自分も地蔵バッグ使ってくれてるやん」

「……まぁね」

昨夜まで埋もれていたとは、とてもじゃないが言えない。

「その格好ってことは今日一日は二足歩行で過ごすんだ」

「一日目やし、そんくらい気合をいれていく！」

鹿は基本的に四足歩行なのだけれど、彼女みたいなお洒落さんは二足歩行を好むらしい。

ただ直立するのはそこそこの筋力とテクニックを必要とするみたいだ。

飲食店や土産物屋が立ち並ぶアーケード街で、ちらほら目に入ってくる他の鹿はやっぱり四本足でのんびり歩いている。

ここら辺まで来ると早朝からお坊さんか巫女さんあたりが祓ったのか、餓鬼の姿は見えなかった。

背中の地蔵バッグはまだしっかり重いしこれで一安心だ。

「猿沢池の桜も満開やし、明日の入学式はばっちりやね」

「僕らにはあまり関係ないけどね」
「新入生確保せなあかんやろ」
「弓道部のスタンスは自分との闘い、無理やり新入生を引っ張ってくるのはかわいそうということで」
「次期部長候補やん、もっとハングリー精神に溢れなあかんって」
「柳生さんがきっとやってくれるさ」

他愛もない話をしていると商店街を抜けて駅前に着く。
今日も行基像は鈍く輝いている。

「あ、青やったのに」

運悪く信号が変わったところだった。

「今年度もはじまるなぁ」
「せやな、来年は受験やから青春を謳歌するなら今年しかないで」
「青春と言われてもピンとこないや。にしても来年は受験か」
「関関同立？」
「や、まだ決めてない。がんばれば神戸あたり狙えるかもしれないし」
「おー、やるやん。一人暮らしはじめたら泊めてな。三ノ宮とか中華街とかぶらついてみたいねん」
「まだ受けてないし受けようかも決めてないよ。そっちは？」
「市立か府立かなぁ」

かの子が前足を額に当てて首を振った。

「あかん、春らしくない気分になってきたわ」
「もうやめとこう。明日は明日の風が吹くってね」

話が途切れたと同時に信号が変わった。
ここを渡れば学校まであと少し。

「そういや『枕』の薬師寺ライブ、チケットとった？」
「ばっちり。今から楽しみやなー」

互いが好きなバンドのライブや、他愛もない話をしているともう学校だ。

「あら、鹿っ子とその飼い主じゃない」
「む」

校門の寸前で声をかけられた。
どれだけがんばって染めたとしても再現できないほど綺麗な金髪に黒のメッシュ、ついでに長いツインテール。
高い身長と釣り目で気の強そうな顔立ちの、ブレザーに身を包んだ見た目だけはパーフェクトな女の子だ。

「トラちゃんぐっもーにん！！」
「おはよう張子さん」

信貴山にある大きな張子の虎を知っているだろうか。
人なんかよりもよっぽど大きなそれは去年のお正月に生誕九十九年を迎えた。
その瞬間彼女は、張子虎珀は生まれたそうだ。
ついでに変身能力まで手に入れて高校生活を楽しむためにウチに入学したとか。
名物の巨大虎がいなくなった信貴山は新たに一回り大きなヤツを作って「また九十九年もたせてみせる！」と息巻いているらしい。

「お、おはようございます……」

それはさておき、彼女にはどうしようもない欠点があった。

自分から言う分には一切問題ないのだけれども、会話が苦手なのだ。

詰め寄られたり会議になれば頷くしかできない、まさに張子の虎の付喪神。

さっきまでの強気な態度がどこかへ消し飛んでしまったように、顔を染めて恥ずかしげに俯いている。

「トラちゃんその性格なおさな……」

「わかってるんですけど……」

そんな性格を知ってか無理やりにでも彼女にアタックする輩は一時すごく増えた。

その窮地を救ったのが我が幼馴染、かの子だ。

自慢のおみ足で群がる野郎どもを文字通り蹴散らしす様は映画のヒーローみたいだった。

それ以来かの子は張子さんにすごく懐かれている。

「そういや同じクラスになれるかなー」

「……なれるといいですね」

「二年連続は難しそうかな」

どんな一年になるのか、少し楽しみだった。

自宅と柳生さんと僕

「今日はここまで。餓鬼注意報も出てるし気をつけて帰るように」

始業式は何事もなく、ホームルームもたった今終わり。

赤い舌をしゅるしゅるさせながら僕らの新しい担任、三輪蛇夫（みわのだゆう）先生は教室をずりずりと出て行った。

「いやー結局同じクラスやったね」

「うん、それに担任の先生もアタリだった」

「三輪の名字を与えられてるなんて、すごい方ですわね」

「三輪先生、結構な名家生まれらしいよ」

「かー！　神社名字は違うねっ」

「かの子さんも土地名字ではないですか」

「若草は大したことあらへんよ。毎年燃えてるし」

「……関係あるんですか？」

大きな白蛇担任の話もそこそこに僕は地蔵バッグを肩にかけた。

「この後どっか行く？」

「弓道部と購買よらないと、清め塩切らしちゃったんだ。かの子は？」

「毎度よろしくあたしは帰ってから父さんの行進見に。今年はなんと、鹿島神が来られるのだ！」

「タケミカズチ様来るの！？　じゃあ絶対見に行かないと」

超多忙な武神様が来るなんて、五年に一度くらいじゃなかろうか。

興奮してる僕らをよそに寂しそうな張子さんはぽつりと。

「わたしは今日住職さんが様子見に来るから……」
家から出られません、と続けた。
「神主さんもタケミカズチ様見たいだろうし、きっと向こうで会えるよ」
「ま、とりあえず帰りますかね」
かの子は蹄と術を器用に使ってランドセルを背負う。
張子さんもそれに倣って革のカバンを手に取った。
「じゃー多分またあとでねー」
「またあとで」

二人と別れてのんべりだんらり学内を歩く。
やっぱりかの子は鹿だけあって歩くのが速い。
ふらふら揺れながら日光を浴びながらがちょうどいいのだ。
重要文化財らしいふるーい記念館を横目に購買へ向かう。
清め塩を買っておいしい棒をもさもさ食べながら講堂の脇をとおっていざ弓道場。
誰もいなかった。
「あら……」
ゆっくり来たからもう鍵が開いてると思っていたのにアテが外れてしまった。
と、そこで思い出す。
ウチの弓道部はそこそこゆるくて、餓鬼注意報みたいなのが出るとお休みなのだ。

「うっかりしてたー」
少し悔しい思いをしながら踵を返す。
「どうした乾？」
「柳生さん」

二メートル以上ある弓袋を肩にかけ、腰まである烏の濡れ羽色した癖一つない髪をなびかせた少女がいた。
見かけ倒しというと失礼だけど、そんなところのある張子さんとは対極をいく存在、柳生宗近さん。
「全日本女番長」「史上最強の女子高生」「柳生の至宝」など、彼女を指し示す言葉は多い。
切れ長の目は鋭く、僕より小さいのにそれを感じさせない輝きと、野暮ったいブレザーでも隠しきれない存在感を放っている。
天下五剣にあやかってつけられた名前の通り、優美さと鋭利さを併せ持ったすごい美少女。
でも、宗近は男性の名前だと思います。
勘違いしたおじいさんが先走って役場に駆け込んだとか。勘違いしていたはずなのに、出生届の続柄は長女となっていたらしい。

「鍵がかかっているのか？」
「そう、それに今日は餓鬼注意報出てるからお休みだよ。忘れてた」
「……そういえばそうだったな」

む、と眉を顰めた表情すらサマになる。
文武両道を地でいく彼女は、あの柳生家の末裔なのだ。
弓道部に所属している理由は知らない。
剣術一本の実家に対する反抗期なのかもしれない。

「とりあえず僕は帰るよ。柳生さんは？」
「……家で刀でも振ることにする」
「じゃ、バス停まで一緒だね」

僕が歩き出せば彼女も釣られて足を踏み出した。
特に会話もなくゆっくり道を往く。
元々僕はお喋りなほうじゃないし、彼女もきっとそうじゃない。
だからなのか、会話のない空間でも変な気まずさはなかった。

桜の下を通り抜けて校門を出る。
ふと、守衛室の警察帽をかぶった鹿が目に入った。
同時にかの子の話を思い出す。
柳生さんも興味があるかもしれない、と話を振ってみることにした。

「柳生さん、今日の騎鹿隊見に行く？」
「いや、さして興味がないのでいかない」
「タケミカズチ様来るらしいよ？」

素っ気ない態度だった柳生さんの目の色が変わった。

「ホントか！？」
「うん、かの子の、若草のお父さん情報。騎鹿機動隊の副隊長さんなんだ」
「そうか、それなら絶対行かないと」

流石刀剣やら軍やらを司る神様、クールなあの子もイチコロだ。
タケミカズチ様は他の神様とは違い、普段から海上保安庁に海軍に国土交通省、皇居や鹿島神宮と春日大社に高天原と忙しなく働か

れている。
春日大社と天界に通じる高天原がある奈良県民でも直接見ることは滅多にない。
「でも往復するには時間もないし荷物が……」
柳生さんは困った顔で弓袋に目をやる。
確かにかさばるし、コインロッカーに仕舞えるはずもない。
柳生さんの家はそのまんま柳生にあるらしい。
奈良市から柳生はバスで一時間近くかかるくらいには遠いうえ、一時間に一本とかそんなレベルだ。
一度家に帰っていては間に合わないに違いない。
そこで僕は親切心から彼女を家に誘うことにした。
なんたって僕の家は近いし、たまには同級生を家に招くのもいいだろう。
「なんなら僕の家に置いてく？　三条通も近いよ」
「……いいのか？」
「いいよ」
「じゃあ、頼む」
すごく思い悩んだ末、彼女はコクンと頷いた。
普段はカッコいいという形容詞が似合う少女のそんな仕草は、例えようもなく可愛らしい。
「柳生さんっていつもは凛としてるのに、たまにすんごく可愛いよね」
「なッ！？」
思ったことをぽろっとこぼすと、柳生さんは俯いて黙ってしまっ

た。
そのまま二人して信号を渡ってアーケードを抜ける。
朝方の餓鬼はお昼にはもう祓われていた。
てくてくと古い街並みをしばらく行けば、改装して窓とかにほんのちょっぴり西洋テイストを取り入れた一軒家が飛び込んでくる。
表札は『乾』、これが僕の家だ。
鍵を差し込んで、物理的にも術的にも手ごたえがないことに気づく。

――兄さん非番だったっけ。

そんなことを考えながらカラカラと引き戸を開いた。

「ただいまー。さ、入って」
「ぉ、お邪魔します」

張子さんみたくおどおどしながら柳生さんは我が家にあがる。
でもきっちりローファーを揃えるあたりが違う。
弓が天井に突っかからないよう注意しながら、足音をたてずに彼女は階段をのぼる。
剣士というよりは忍者みたいだった。

「ここが僕の部屋、ちょっと汚いけどね」
「そんなことない」

彼女は弓を壁にたてかけて、本棚やベッドに視線を走らせた。
きょろきょろと部屋を観察されるのはなんとも気恥ずかしい。
隅っこの埃とか目がつきませんように、と祈りながら制服を脱ぐ。
椅子の背にひっかけてあったジーンズに足を通して、ぬいぐるみっぽい謎生物の描かれた黒いパーカーを羽織れば着替えは完了。

柳生さんはというと、興味深そうに漫画の背表紙を眺めている。
「お昼オムライスでいい？」
「え？」
「時間、もう正午だよ」
僕が指さしたシンプルな壁掛け時計は、長針と短針が重なり合って少したったところだ。
「お昼まで世話になるわけには」
「いいよ。どうせ兄さんの分も作らなきゃいけないし」
「……では、お願いする」
「りょーかい。二十分くらいテレビ見るなり漫画読むなり気楽にしてて」
遠慮が美徳という日本人精神をこれでもかというくらい体現した彼女のためにも美味しいオムライスを作ってやろうじゃないか、フフフ。
なんて内心ほくそ笑みながら、果たして友人を部屋に放置するのはどうなんだろうとも思う。
一階のリビングに足を踏み入れると、新聞紙をアイマスク代わりにして兄さんが横たわっていた。
非番の日はいつもこうだ。
無視して冷蔵庫と床下倉庫から食材をどさどさ出して机の上に並べる。
さぁ、レッツ・クッキング。
「くぅっ、やるではないか。しかし第二第三の料理人がいつか……」
「何やってんだ？」

タマネギ相手に魔王様ごっこをやっていたら兄さんがのっそり起き上がってきた。
軽く死にたい。
何事もなかったかのようにごまかそう。

「見りゃわかるでしょ。オムライス作ってんの」
「ほー、てか多くないか？」
「友達来てるから。兄さんの分を先に作るからそれ持って部屋に引っ込んどいて」
「へいへい」

ぼりぼりと黒い短髪をかきながら兄さんはソファーに戻り、新聞を広げた。

「あと、最近そんな魔王はいないらしいぞ」
「……っ」

ぼそっと言われるほうが大きなダメージを受けるみたいだった。

オムライスと釈迦と僕

腹いせにしっかり火を通した卵をのっけたオムライスを手渡し、兄さんを部屋に追い払う。
柳生さんの分はふわふわとろとろだ。
僕の分は失敗して少し固い上に、形が崩れてしまった。
スプーンも麦茶もあるし、ケチャップは好みに個人差があるから机の上において準備は終わりっ。

「ご飯出来たよー」
「ッ！？」

シュパッ！
そんな空気を切りさけそうな音が聞こえた。
柳生さんはこちらに背を向けて、何かを抱きしめるみたいにしている。

「どしたの？」
「な、なんでもない！」

亀のように丸まっているけど、置いていくのも変な話だ。

「ご飯出来たから食べよう」
「わかった」
「いや、早く行こうよ」
「少ししたらいく」
「冷めちゃうよ」
「冷めない」

何をもって冷めないと彼女は言うのだろうか。
僕はよくわからない。
柳生さんにも子どもっぽいところがあるんだなぁ、と少しほっこりした。

「じゃ、先降りてるから早く来て」
「ああ」

お母さんみたいなことを言ってドアを閉める。そして。

「なんてねっ！」

勢いよく開く！
柳生さんは本棚に漫画を戻そうとして固まっていた。

「あ……」
「ああ、『釈迦に届け』か。いいよねそれ」

変に丸まってるからもっと何かあると思ったのに、残念だ。
でも少女漫画を読む柳生さんっていうのはちょっと新鮮。

「早く降りてきてねー」

ダイニングについてすぐ、彼女も気まずそうな顔でやってきて席に着いた。

「えっと、ありがとう。いただきます」
「どうぞ召し上がれ。僕もいただきますっと」

ちょっぴり冷めているけれど、中々イケる。

程よい酸味とサッと火を通して歯ごたえが残っているタマネギのコントラスト。
そして小さく切った鶏肉の旨味！
うん、偉そうに言ってるけどホントはそこまで詳しくない。
ただ、オムライスは卵よりもチキンライスの出来こそが大事だと悟った。
やはり人間見た目より中身、料理もそれに通じるに違いない。

「料理、上手いんだな。美味しいよ」
「ありがとう。母さんがずいぶん前に亡くなったから慣れたのかも」
「母上はどちらへ？」
「常世の国。今も週一で電話しるよ」

母さんは僕が二歳のころに亡くなったらしい。
二歳児の記憶なんてあやふやなもので、母親の顔なんて写真のものしか記憶にない。
付き合いのあったかの子の家族もよくしてくれたし、片親の不幸なんてほとんど感じなかったと思う。
それに善人かつ神道系だった母は、常世の国の住人になったのだ。
エジソンさんの発明した天国電話で、いつでも連絡をとることができる。一昨日も「ワタツミ様が～」と無駄話をしていた。

「それよりさ」
「ん？」
「柳生さんって少女漫画好きなの？」
「んンッ！？」
「へ？　とりあえずお茶飲んでお茶！」

僕の質問に、なぜか柳生さんはむせた。
お茶を飲む彼女を正面から見守っていると、ホントにお母さんみ

たいな気分だ。

「大丈夫？」

「あ、ああ。心配かけた」

「で、好きなの？」

「……」

ぷいっと顔を逸らすのがまた子どもっぽい。

思わず声をあげて笑ってしまう。

「柳生さんってそんな顔もするんだね。今日はホント誘ってよかったや」

友人の新たな一面を発見するのは楽しい。

それがこれまで親しくなかった友ならなおさらだ。

「……実家はアレだから、剣術ものしか置いてなかったんだ。その中に少女漫画も少しだけあって、だから興味があった」

「ああ、なるほど」

確かに柳生家なら剣術ものはトンデモ漫画だろうとなんだろうと取り揃えているだろう。

「でも『釈迦に届け』はちょっと特殊だよ？」

「いや、それでも少し共感できた」

「マジか……」

作者がお釈迦様にお供えした時苦笑されたという、いわくつきの漫画なのに。

歴史改変ものが好きなんだろうか。

「主人公が見た目から誤解されているというのが、ちょっとな」
「？」
『釈迦に届け』の主人公は中身がピュアなのに見た目超暗い。
キラッキラに美化されて「徳から出来てる」と言われるお釈迦様に憧れるストーリーだけど、彼女とはちょっと結びつかない。
「私も誤解されやすいからな」
ああ、あの出来事のことだろうか。
彼女は口数がさほど多くないうえ、良くも悪くも率直な言い方を好む。
だが女子というのは持って回った言い方をするのが大半で、会話もそういう風に迂回した意味合いでとることがままある。
それがすれ違いやら勘違いを生んで、一時柳生さんは孤立していた。
名家に生まれ、容姿に優れ、文武両道ということがやっかみを買ったというのもあるだろう。
その問題は去年の冬ごろ解決した。
何故か、例によってかの子が状況をブレイクしたから。
アイツは生粋のトラブルメイカーというか、物事を荒らして好転させる才能に溢れすぎているや。
その日、遅刻したかの子が寝そべっていた土蜘蛛の腹を踏んで、それに気づかず学校に到着。
生徒を護るため、柳生さんが怒った土蜘蛛とガチンコバトルを繰り広げたのだ。

土蜘蛛なんて、円卓の騎士だとか三国志の武将だとか源頼光だとか、英雄クラスじゃないと討滅できない。それも霊験あらたかな武器をもたせた上でだ。

なのに、彼女はあろうことか竹弓とジュラルミンの矢で追い払うことに成功した。

奈良県警の騎鹿機動隊に通報するまでに九分、たったそれだけで片をつけてしまう武神のような凄まじさ。

あの時の柳生さんは本当に凄かった、ハリウッド映画から出演のオファーが来たくらい。

以来「今代の柳生を怒らせるな」という不文律が校内どころか日本国内にでき、彼女は日本の番長みたいな存在になった。

次期近畿守護職の座も内定して将来も安泰だ。

ついでにかの子はその日おじさんにこっぴどく怒られたとか。

とにかく、柳生さんの勇姿に心打たれた女子陣は和解し、高校は平和になったそうな。

ちなみに僕は柳生さんがハブられているとは知らず部活で普通に話しかけていた。

そんな友だちも多くないし、クラスが違うと案外情報が入ってこなかったりする。

まぁ今は何事もないから終わりよければすべてよし、ってヤツだ。

「ごちそうさまでした」

「はい、お粗末さまでした」

パンと手をあわせて食後のあいさつ。

考えながらも口と手は動いていて、お互いお皿の上は綺麗になっていた。

時間はもう一時になるころ、洗いものは水につけて帰ってから洗うことにしよう。

「ちょっと兄さんに言ってくるから先行ってて」
「ああ」
ぱたぱたと小走りで兄さんの部屋へ、ドアの外から声をかければ充分だろう。
「兄さん、騎鹿隊行進友達と見に行ってくるから」
「あいよー」
少し眠そうな声が聞こえた。
きっとこの後も寝るに違いない、鍵をかけておかねば。
玄関に戻ると、柳生さんが待っていてくれた。
「先行ってて、って言ったのに」
「気にするな。一人より二人という言葉もある」
美少女のくせに男前なことを言ってくれる。
くっ、惚れちゃいそうだぜ。なんてバカなことを考えながら二人、石畳の道を歩く。
道すがらかの子にメールを送ってタケミカズチ様が出てくる場所の確認は忘れない。
「夕方から天気崩れるって言ってたけど、そんな様子はないね」
「そうなのか。傘を持ってこればよかったな」
「帰りにウチの傘貸すよ。鬼火の中歩くのもアレだし」
「ありがとう」
まあどこから雲が来るんだ、というくらい空は爽やか。

鬼雲は発生が急だからなんともいえないんだけど、行進には一切差し支えがなさそうだ。

「お、返信来たか」

『おとんが言うには春日大社の南門。本殿までいったらあかんで「┻(*`ー´)┻」』

角つき顔文字は流行らないって言ってるのに、頑固者め。

「春日大社の南門にタケミカズチ様来られるって。時間あるけど行進見に行く？」

南の方に目をやれば、屋根の合間からは飛び回る騎鹿がゴマ粒みたいに小さく見えた。

スムーズに飛んでるからアレはベテランさんだろう。

行進自体はもうはじまっているみたいだ。

「そうだな、折角だし見に行こう」

こくんと彼女も頷いたので道をひたすら西へ行く。

今からなら三条通の入り口で遭遇できるはず。

周りは西進する地元民と観光客でごった返していて、いつもの奈良らしくない。

背が高かったり金髪だったりと海外からのお客さんも多い。

きっと昨日の埴輪祭りからの騎鹿隊行進コンボで観光していくに違いない。

くそぅ、奈良県税収アップのためお金を落としていきやがれ。

とにかく背の低い柳生さんは完全に埋もれていて、手をつながないとはぐれてしまいそうだった。

「柳生さん！　手！！」
「手？」
人波を縫って近づいた僕の声に、彼女は自分の手を不思議そうに見つめた。
説明するのも面倒だからその手をとってずんずん歩く。
彼女よりも僕は背が高いし、たまには人を引っ張っていくのも悪くない。
握った手は僕のよりも少し硬かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3187z/

若草山三千桜

2011年12月15日01時52分発行